

装備報告

準備段階で使用カヌーを木製あるいはアルミ製カナディアンカヌーにするか、空気注入式のカヌーにするか意見が別れた。前者は後者と比較して航行スピードは速いが、重荷を積んでいる時の安定が悪く、さらに転覆した場合は水中に没してしまう。後者は前者とは全く逆の特性を持ち、スピードは遅いが安定が良く、転覆した場合でも沈むことはなく水上でそのまま艇を立て直すことができる。更に、使用しない時は空気を抜くとコンパクトに折り畳めるので、持ち運びに便利であった。以上の理由からグラブナー社製アウトサイドという岩谷産業(株)がオーストリアから輸入している空気注入式のカヌーを使用することにした。実際使用した3艇の内2艇は新品でもう1艇は3年前に中国のタクラマカン砂漠を流れるタリム川航行時に使用したもので、毎日少しづつ空気が抜けてしまうなど老朽化の問題があったが遠征中はパンクも起こらず順調であった。航行中の荷物の積載重量は約10日分の食糧、個人装備、団体装備など1艇につき90~120kg(人間を除く)であった。

航行中2回の転覆があった。積み荷の重心を高くしてしまった艇が波と風に耐え切れなかったためである。そのため故障・流出した装備がいくつかあったが、航行に影響を及ぼすようなこともなく、流出したものも流域の町々で補給することができた。しかし、いつの間にか航行中の座布団変わりとなっていたライフジャケットの流失など、本来身につけているべきものが含まれていたことは反省しなければいけない。

テントは就寝用2つと食糧用(熊対策のため、就寝用テントから離れた場所に食糧を保管しておき、雨の日はこのテント内で調理・食事をする)を日本から持って行ったのだが、3ヶ月を越える長期使用には耐え切れず、入口のチャックがすべて壊れてしまいマジックテープで補強はしたのだが素人の小細工は通用せず遠征最後の1か月は巨大かつ数の多さで有名なアラスカのヤブ蚊やブヨの餌食になってしまった。朝目覚めるとテントの天井は南半球の星空のごとく数え切れない虫で覆われ正に悪夢であった。準備段階でメーカーに相談すれば良かったと思われる。本来匂いを密封して熊を近づけないための食糧用テントもチャックが壊れたため逆に街角のウナギ屋のように匂いを放って熊に対してどうぞいらっしゃいと言っているようなものとなってしまったが幸い熊の襲撃には会わなかった。

熊の襲撃に備えて当初はショットガンを持つとうと思っていたが、素人の我々が慣れない銃を持つことは熊の襲撃よりも危険になりそうであったのでやめた。その代わりにベアバスターという熊の嫌がるさいりゅうガスを発射するスプレーを用意したが遠征中は使用することがなかった。しかしそのパワーは凄まじく、遠征出発前に隊長が試しだといって狭い部室内で微量を発射したところ4階建ての建物全体に鼻を突く強烈なガスが充満してしまい10分後には苦情が殺到した。

今回我が部で初使用となったGPSシステム(衛星通信ナビゲーション)は大きな役割を果たしてくれた。この機器によって地球上空にある20程の専用衛星のうち2つから3つの衛星より信号を受信して誤差20m以内で現在位置を正確に割り出すことが可能で、特定の場所をインプットしておけばそこまで誘導してくれる。川幅10km近くに膨れ、多数の中洲が迷路状になっている場所などでは補給地点を通り過ぎないように常に自分たちの位置を確認した。

電池も3か月分になるとばかにできない量で使い捨てのものはゴミが増えるということで今回は充電式ニッカド電池を使用した。白夜で1日中沈まない太陽からソーラーチャージャーを使って電力に変換したが、ビデオカメラなどよく電力を使う機材もおかげでフル稼働させることができた。

以上が主な装備に関する報告であるが、最近の野外活動用装備は科学技術の発展と共に日々進歩し続けあらゆる面で我々の行動の危険度を削減し、計画をより確実に遂行させてくれた。

最後に、これまで装備に関して様々なご援助を下された方々にはこの場をかりて感謝の気持ちを伝えたいと思う次第である。



輸送報告

遠征まで2年間の計10回の国内訓練合宿での基本輸送方法は往路に関しては常に公共の乗り物を使って、40kgほどの荷物を背負って北は北海道、南は四国まで、縦横無尽に移動していた。折り畳んだこ汚いゴムボートや何やらを背負い汗だくになりながら満員電車に乗ったりしていた。新潟市内のバスでは、あまりの荷物の多さと汚さで運転手に怒鳴られたこともある。合宿の復路で毎回決まって宅急便に荷物を託すのは、疲れ果ててもはや来たときの荷物を背負うことができないからである。

ところで本遠征の輸送に関してもこれまでの国内合宿と同様、往路はすべての荷物を背負ってカナダ入りした。今までの国内合宿と違う点といえば、海外遠征ということで荷物の量が膨れ上がったことや飛行機で出かけるということ。空気注入式のカヌー3艇をはじめとする航行装備、テント3つをはじめとする野営装備、ビデオやカメラをはじめとする撮影機材、寝袋や各自の持ち物で一杯の個人装備など6人に均等に振り分け1人当たりの荷物は50kg前後、荷物の数は全部で12個になり航空会社のカウンターではあまりいい顔をされなかったが、その点国内合宿で鍛え抜かれているので平気であった。バンクーバーやホワイトホースなどの洒落た街中を唐草模様の大風呂敷をかっついて歩いているようで恥ずかしかった。貧乏学生の執念と言うべきか、結局往路で輸送にかかった費用はゼロに近く、あえてあげるならホワイトホース空港からホテルまで遠かったためレンタカーを借りたぐらいである。復路は言うまでもなく疲れ果てているため、また現地解散後各自が身軽になれるように日本エクスプレス・アンカレッジ支店に大半の荷物を託し、関西国際空港まで輸送してもらう。約1kgにつき\$5.65の運賃(アメリカ輸出通関手数料込み)。日本国輸入通関手続きは後日大阪税関へ行って荷物引き取りの際に行った。



食糧報告

総括

遠征を終えてから食糧係としてふりかえてみると、さほど困難もなく義務を果たすことができたと思う。

ユーコン河では途中で食糧調達可能な村や町が22か所あり、しかも村と村の間隔が長くても300kmであったのでひもじい思いをしたことはほとんどなかった。あったとすれば天候があれど停滞した日に朝食・昼食を抜いた時ぐらいである。これは、予想以上に停滞日が長く食糧を節約した方がよいと判断した時だけである。

日本からは手荷物で醤油を2Lとみりんを1Lもって行った。醤油はサーモンや肉を焼いた時、目玉焼き、肉じゃがを作った時など多用し途中で0.5L買い足した。一方みりんは肉ジャガ、牛肉と大根の煮込みを作った時以外はほとんど使わず0.5Lを使ったのみであった。醤油、米などはユーコン河沿いの小さな町でも手に入った。

水のタンクは料理用と飲料水用の2種類を用意し、飲料水は補給地点で補充していったが、料理用はユーコンに大小合わせて数千と流れ込む沢からも補充した。ただし、上流部500kmはユーコン本流の水がきれいだったので川から直接補充した。

航行中幕営地をなるべく中洲に選んでいた。これは熊が居ないためである。そのため中洲では食糧用テントは就寝用テントの近くに張っていた。しかし、岸に幕営しなければいけないときは双方を数十m離して張り、調理も就寝用テントから離れておこなった。

非常食は常に各隊員6食分の乾燥食をもっていたが、一度も使うことはなかった。



鮭と筋子のはなし

インディアンが鮭を捕っているところに出くわすことが多く、鮭を丸ごともらったりすることが多々あった。キングサーモンやシルバーサーモンで、前者の場合は一匹あれば6人でも食い切れないほどの大物だ。彼らは筋子を食べる習慣がなく犬などの餌にしてしまうので、頼めばいくらでも手に入った。2匹分の筋子をもった時などは、即座に醤油に漬けて晩には熱々のご飯にのせて食した。最高、としか言いようがない。ただし、数名下痢になる。また、彼らの作るスモーク・サーモンは天下一品で市販のものなど足元にも及ばなかった。ある夜、テントで寝ていると酔っ払ったインディアンがスモーク・サーモンをどっさりともって来てくれた。スモーク・サーモンに目がない隊員（特に隊長）はすかさず食らいつく。真っ暗で何も見えなかったが、確かにサーモンだ。しかしちょっと妙な味がする。目がない連中はすでに自分の取り分を平らげている。翌朝明るくなってから気づいたのだが、昨夜のサーモンは犬の餌用のチャム・サーモンという一番下等の鮭で、地元の人には決して食べないものである。しかもスモークされておらず朝日に光る青いカビが眩しすぎた。当然昨夜に食べ過ぎた人は気分を悪くしていた。

物価調査

カナダ領の町村についてはそれぞれの町がすべて道路でつながっており、大都市から陸上輸送できるからか物価の上がり方はおだやかであった。

アメリカにおいては、大都市と道路で結ばれているのはイーグルとサークルのみで、他の村は飛行機や貨物船に頼っている。そのためサークルからフォート・ユーコンへ行くと物価が急激に上昇する。フォート・ユーコンから下流の町は、缶詰など長持ち食品や様々な生活物資は貨物船で、肉、野菜などのものは飛行機を中心に輸送されている。以下にカナダ、アラスカ各最初に出発した(通過した)地点を100とする主要食品の物価指数を記す。

地名 (人口)	物価指数	地名 (人口)	物価指数
カナダ			
Carcross (400)	100.0	Tanana (486)	277.7
Whitehorse (15199)	102.1	Ruby (233)	208.5
Carmacks (280)	104.1	Galena (847)	222.6
Dawson (896)	107.5	Koyukuk (99)	198.3
アラスカ			
Eagle (185)	100.0	Nulato (382)	169.5
Circle (101)	125.0	Kaltag (280)	166.4
Fort Yukon (641)	182.8	Grayling (211)	136.4
Beaver (66)	140.8	Anvik (114)	146.8
Stevens village (96)	277.4	Holy Cross (262)	118.7
Rampart (50)	277.0	Russian Mission (175)	106.4
		Marshall (442)	149.0
		Pilot Station (463)	134.8
		Mountain village (665)	106.4
		Alakanuk (546)	106.4



医療報告

内服薬

用途	携帯数量	品名	使用頻度
風邪	80	パブロンS	◎
	12	改源	・
解熱・鎮痛	60	バファリン	☆
下痢	60	ビオフェルミン	☆
食あたり	30	ブスコパン	・
消化不良	45	コンクタス	☆
抗生物質	180	コンフスパン	☆
精神安定剤	50	ネブスン	・
のどの痛み	48	トローチ	◎
栄養補給		パンビタハイ	◎
		シナール200	◎

※使用頻度記号

- ◎ 10回以上
- ◇ 5回以上
- 10回未満
- ☆ 5回未満
- ・ 未使用

外用薬

用途	品名	使用頻度
消毒	オキシドール	☆
化膿止め	クロマイーP軟膏	◇
	エアゾリンD I	☆
火傷	メントールム	・
虫刺され	ムヒ	◎
	ウナコーワ	◎
虫よけ	モスコール	◎
筋肉痛	湿布	◇
	ラブ	◎

衛生材料

品名	綿	ガーゼ	テーピング	三角巾	綿棒	体温計	爪切り	バンドエイド
頻度	◇	◇	・	・	◎	◇	◎	◎

合宿中は疲れのためか4週間周期ぐらいでやや体調を崩すことがあったが、航行に影響するような病気はなかった。あえて言えば、インディアンとの付き合いで高木隊員が二日酔いになり、半日ボートの上に横になって残りの5人がエンジンとなり輸送したことだ。

北極圏付近を航行中は日中の気温が30度以上になり、夜間も白夜で気温があまり下がらないので疲労が重なってしまったようだ。そのため8月にはビタミン剤の摂取が多かった。

最も使用頻度が多かったのは虫よけとかゆみ止めであった。容赦なく襲ってくる蚊やブヨに我々は閉口した。ここで特記すべきことはカナダ・アラスカで市販されていた強力虫よけだ。日本とは違って成分の規制がなく超強力で、誤ってこぼしてしまったナイフの柄のプラスチックが溶けていた。それを肌に直接つけると皮膚ガンになるといわれていたことがよく理解できた。

当初心配した飲料水からの細菌感染（現地ではビーバーフィーバーと呼ぶ）についても、飲料水は川から汲んだ場合は沸騰殺菌していたので危惧するほどでもなかった。

最後に、本遠征の医療準備においては同部28代OBの浅井武司氏に大変お世話になり心から感謝する次第である。

撮影報告

—使用機種—

NIKON NEWFM2 2台 (80~200m、35~50m、20m)
CANON EOS750 1台 (35~50m)

—使用フィルム—

フジカラー SUPER G400 (36枚) 76本
プロビア100 (リバーサル36枚) 11本
プレスト400 (白黒36枚) 10本

一番苦労したのは航行中の撮影である。いうまでもなくユーコンは大河であるがその上をいくカヌーを風景の中に写し込む作業が思いの外大変であった。いつもカヌー同士がくっついていては数100m離れることも稀ではなかった。だから撮影するときは他艇を待ったり、追いついたりの繰り返しであった。

曇天の時はともかく、晴天時の写り具合を比較するとポジとネガとでは断然ポジの方が美しい。今回ポジフィルムを30本持参したが、11本しか使用しなかった。遠征前半で晴天が多く何枚も撮ってしまっただけで後半の分がなくなってしまうと思っておさえていたのだが、予想以上に後半は悪天続きで使用機会がなかったというのがその理由である。

航行中は防水袋にカメラをいれていたが6/25の沈の際に小さな穴から浸水し1台を使用不可能にしてしまったことと、望遠レンズを濡らしてしまったことは反省している。

カナダの湖からアラスカのベーリング海まで、風景の移り変わりと出来事をまんべんなく撮影することを心掛け、常にカメラと行動するようにした。ある時、腕にカメラをいれる袋を下げたまま夢中で撮影していたら横にいた戸谷に「林家ペーみたいですね」と言われたが、そのことは今でも私の誇りとして胸に残っている。またフィッシュホイールにかかったサーモンを見つけたら、ブラックベアを発見したときは感動と驚きの飽和状態に陥ってしまい頭がパニックになりシャッターを押し狂ってしまい、無意味なサケや熊のアップ写真が何枚もできあがっていた。

全部で3000枚近くの写真が現像されたが、そのうちのどれだけ良いといわれる写真があるか分からないが、一連の記録としてスクラップブックに整理しておいたので是非見て欲しい。また批判して欲しい。

最後になりましたが機材を貸与、またフィルムを援助して下さった方々にこの場をかりて深く御礼申し上げます。



会計報告

◎国内準備費用収支

◇収入(隊員各自負担¥820,000×6人)+(餓別)+(預金利息) ¥5,053,973

◇支出

渡航費(¥207,900×6人)	¥1,247,400
装備費(カヌー2艇、テント2張りをはじめとする諸装備)	¥ 948,049
撮影機材費(含むポジフィルム代金)	¥ 195,594
食糧費(主に非常食)	¥ 14,878
医療費	¥ 26,775
保険料(4か月間付保)	¥ 166,620
雑費	¥ 18,833
合計	¥2,618,149
残金	¥2,435,824

◎外貨両替

※上記残高の内¥1,435,824をUSドルに換金し、残りの¥1,000,000を緊急用予備費として2種類のクレジットカード口座に分割して預金した。

現金 ¥ 158,022	→	現金 US\$ 1,475.28	
現金 ¥1,264,800	→	T / C US\$12,000.00	
手数料 ¥ 12,648			
現金 ¥1,000,000	→	普通預金(クレジットカード) ¥1,000,000	
合計 ¥2,435,470	→	US\$ 13,475.28	
		¥1,000,000	
残金 ¥ 354			

◎現地収支

(1) カナダ

◇収入(T/C US\$3,000.00をCANADAドルに換金) CA\$ 3,817.75

◇支出

食糧費 CA\$ 1,707.51

装備費 CA\$ 1,235.50

現像費 CA\$ 56.66

雑費 CA\$ 216.90

合計 CA\$ 3,216.57

残金 CA\$ 601.18

※ CA\$残金はカナダ領航行終了後、6人で分配する。

(2) アラスカ

◇収入(US\$の所持残高) US\$10,475.28

◇支出

食糧費 US\$ 2,879.88

装備費 US\$ 69.79

雑費 US\$ 50.00

輸送費 (Anchorage→Osaka) US\$ 951.27

合計 US\$ 3,550.94

残金 US\$ 6,924.34

※ US\$残金はアメリカ領航行終了後、6人で分配する。

◎事後収支

◇収入(クレジットカード緊急用予備費残高) ¥1,000,000

◇支出

航空料金	(Alakanuk→Anchorage ¥30,523×6人)	¥	183,138
滞在費	(Anchorageにて)	¥	25,836
装備費	(転覆により被害を受けた撮影機材の一部を修理・購入)	¥	87,379
現像費		¥	110,999
土産代		¥	92,463
雑費	Whitehorse, Anchorageでのレンタカー料金 ガソリン代・荷物引き取り時の関西国際空港までのレンタカー 高速道路料金、通関費用、その他	¥	92,346
合計		¥	592,161
残金		¥	407,839

※ 以上の会計報告は1995年1月1日現在のもので、この後も携行品損害保険金の収入や報告書作成費用、転覆により被害を受けた装備の弁償費用などの支出が見込まれる。

最後に、出発前に多額の餞別を小子どもに下さった皆様には、本遠征において有意義に使用させていただきましたことを御報告し、これを感謝の言葉とさせていただきます。